

Episode 8 (前編)

50余年昔の米国留学 —Prof. Dameshek の最後の fellow—

本コーナーのタイトル「Be Ambitious！」はウイリアム・エス・クラーク博士の名言 “Boys, be ambitious like this old man” から拝借しました。「未来を自ら切り拓くべし」という後進への強い期待の意も込めて、長年に渡り、血液学の世界で活躍して来られた名誉会員の先生方から現役の先生方に向けた熱く且つ含蓄豊かなメッセージをお届けいたします。



東京医科大学名誉教授
第17期日本学術会議会員
損保ジャパン日本興和診療所
外山 圭助

はじめに



何年も前に編集委員会から、Prof. Dameshek の教室への留学について書くようにと御指示をいただいていた。しかし、パソコンに向かうと坐骨神経痛が悪化して何度も中断していたが、本年度から臨床血液誌に「Be Ambitious!」という題の付いた欄ができ、やっと完成した私の原稿の内容は、これに合致するか疑問である。しかし、50余年昔の米国留学は、今振り返るとカルチャーショックの連続で、まさに隔世の感がある。微力な私が独立で米国に留学した体験は、私にとって be ambitious であり、外国留学をお考えの若い先生方にお役に立つことを願っている。

初めての渡米



1963年6月21日、米国の Prof. William Dameshek のもとに留学するため、ボストンを目指して東京を発つことになった。当時は東京オリンピック前という時期で、高速道路もモノレールもなかったので、早朝に兄の運転する車で、見送りの父母と同乗し一般道を通って時間をかけて羽田空港へ到着し、ここから、手荷物と自分の胸部X線写真（平面と肺尖撮影）を持参し、希望と不安を抱いて出発を待った。当日は慶應大学内科から同時期に米国でインターンを目指す松岡健平（後に日本糖尿病学会理事長）先生ともう一人の後輩医師と同じ航空機に乗ることになっていた。そのため、図らずも羽田で医学部の応援団員の（盛大な？）見送りを受け、当時とはいえかなり恥ずかしかった。また、羽田の滑走路が長距離ジェット旅客機DC8やB707に短すぎ、夏季には空気密度低下による重量過重で全座席を乗客で埋めることができず、しかも、滑走路の全長を使ってやっと離陸できた状態であった。

当時の太平洋路線は米国のパンナムとノースウェストと日本航空のみで、私の乗ったJALのDC8機は米西海岸まで一気に飛ぶことはできなかった。午前に羽田をたち、夜にホノルルに到着し、そこで入国審査を受け、同時に持参した胸部レントゲン写真で結核がないという証明を得て無事に合衆国入国となった。ホノルル空港で給油の時間待ちのために、JALが用意したカフェテリアでお茶をすることとなり、白人のウエイトレスから、アイスクリームのフレイバーは何かと聞かれ、バニラと英語を発したところ、これが通じて大いに安心した。というのは、当時米国帰りの神経内科の先輩にバニラという語はなかなか通じないと脅されていたからである。

夜明けにサンフランシスコ空港に到着し、迎えに来てくれた松岡先生の知り合いの米国人の大きな convertible car で街に向かう際、highway を猛スピードで走行したときは初めてのことゆえ大変感銘を覚えた。また、当時、東京では渇水のため水制限を受けていたのでサンフランシスコの街では、公園や家々の庭に sprinkler で絶えず水が撒かれており、青々とした芝生の風景にも感心し、かつ日米の経済的な差を痛感させられた。

サンフランシスコで 1 泊、翌朝、ロスアンジェルス経由の飛行機で大陸を横断した。途中、飛行機から眺める景色は、広々とした大地、山また山、畑ばかりの平原と中に縦横に広がる高速道路、海のように大きな湖、そして、森と湖の大地と私にとって初めての光景であった。日が傾く頃、やっとボストンの町が見えてきたが、空から見るボストンの町は、高層ビルの数は少なく、町の中心とおぼしきところに唯一の高層ビルが建設中であった。西海岸から東海岸まで、4 時間の時差があり、中学生のときに終戦を迎えた私としては、つくづくこのような大きな国と戦争したむなしさを感じた。

ボストン空港には慶應大の 1 年下で、Tufts-New England Medical Center の Cancer Research の Fishman 教授のラボに在籍中の渡辺慶一（後の東海大病理学教授）先生が迎えに来てくれた。空港から車で highway を通って、down town の中華街を抜けてすぐの Harrison Avenue を通っているときに、「外山さん。この左右の建物が Tufts Medical Center の建物で、この右側の 6 階建ての褐色の建物が、先生が働くことになる New England Center Hospital ですよ」と言われたときには、私の想像では米国の大学病院は広いキャンパスにビルが建っているものと思っていたので、当てが外れた感じだった。そのビルの反対側にある 4 階建て建物が私の住処となる寄宿舎 Posner Hall であった。寄宿の 4 階の部屋に入ると、ドアの反対側に中庭に面した窓が一つあり、庭をはさんで看護学生の宿舎があった。片方の壁際にベッドと簡単な洋服たんすがあり、反対側の壁際に黒い電話がのっている机と簡単なたんすが一つ置かれていた。共同のトイレとシャワー室は廊下を挟んだ反対側にあった。夏休みのせいかビル全体が静かであったが、冷房がなく、西日を浴びて室内はむつとした状態であった。その後、渡辺先生に寄宿舎地下の電気洗濯器が並んだ洗濯室やすぐ近くにある病院スタッフの駐車場、病院内のカフェテリア、病院付近のカフェ、理髪店など、とりあえず生活に必要な場所を教わった。長い日が暮れると、部屋と反対側の窓からは、当時ボストンでもっとも有名なハンコックビルの屋根の上に、明日の気象情報が点灯するのをながめて、私は留学第一夜の眠りについた。

私の Tufts 大学スタッフとして正式なプログラムの開始は 7 月 1 日からであり、Prof. Dameshek とは事前に手紙で 6 月 28

日午前に appointment をとってだったので、ボストン到着から約 1 週間は留学生活をスムースに送るための準備に当てるよう利用することができた。当時は現在では考えられないことであるが、米国から帰国した神経内科の先輩から“留学期間をノイローゼにならないことが最も重要で、まずその土地になれることが肝要だ”とアドバイスされていたことも早めに米国に来た理由である。

Tufts-New England Medical Center は down town にあり、近くにチャイナタウン、1 ブロックのところにデパート、ウォルマート、映画館、酒場などがある Washington Street あり、常に喧騒にあふれていた。また、数ブロック先には、Boston Common と Public Garden という古くから有名な公園もあり、金色の丸屋根を持つ州議事堂をはじめ、米国独立に関係する有名な建物・場所を巡る Freedom trail があった。近くに subway の駅もあり、有名な美術館や symphony hall に容易に行ける利点もあった。したがって、ほどなく渡辺先生の薦めにしたがって、ボストン交響楽団の定期演奏会のチケットも手に入れることができた。これもある意味ノイローゼ対策である。後になって宿舎の近くの中華料理店に行ったとき、中国人の女主人から日本人医師の消息を尋ねられ、その医師がすでに帰国したことを告げると、「それは良かった、彼がここで酒を飲んでしばしば醜態を見せたのは、家族と離れ単身渡米してきた寂さからだ」と言われた。このような時代でもあった。

留学の準備



私は 1958 年に慶應義塾大学内科学教室の三方一沢教授の大學生となり、長谷川弥人講師の主催する血液研究室に属し、内科学教室の当時のシステムにしたがって臨床と研究に従事した。臨床に関しては病院にはまだ中央検査室が存在しなかったので、病棟では回診前に全血液患者の耳朶からメランジュールを用いて採血、末梢血検査を行い、末梢血標本を自分で染色、鏡検してヘモグラムを読む。さらに検尿や血糖の定量や肝機能検査も病棟の検査室にて自分で測定した。保存血輸血はボトルに入っており、新鮮血輸血は提供者から 100 ml のガラスの注射器に抗凝固剤を入れて採血し、そのまま患者さんに注入するという時代であった。

私の祖父・外山亀太郎は東京帝国大学農学部教授で、1906 年にメンデルの法則が動物（蚕）にも適用されることを世界で初めて実証し、かつ、蚕の一代雑種の有利性を実用化し、日本の養蚕改良に貢献した。その功績により帝国学士院賞と日本発明協会恩賜記念賞を受賞した。また、1911 年から 2 年間、政府派遣で

ヨーロッパに留学したと、子供のときから父から聞かされていたので、漠然とした外国留学の憧れを持っていた。

私が米国留学を目指したのは大学院4年頃で、当時、血液研究室からは2年上の先輩が自身で職を求めて、ドイツ、フライブルグの有名なProf. Heilmeyerのところに留学中という状態であり、特に外国のどこかの大学や研究室と交流があったわけではなかった。そこで自分の履歴と現在までの研究歴を記し、2~3年留学したい旨をWoodstockの古い手動のタイプライターを打って手紙を作り、10数通いろいろな大学の先生宛に送った。返事は有望なもの、全く望みのないもの、いろいろあったが、1962年春頃最初にfellowshipに関して具体的に返事を下さったのがProf. William Dameshekであった。先生の教室にはtrainee, researchとclinical fellowの3種のfellowshipがあり、それぞれの内容や条件などが書いてあった。当時、Prof. Dameshekは雑誌Bloodのeditor-in-chiefであり、白血病やHodgkin病の化学療法、ITPのステロイド療法の先駆者として、またmyeloproliferative disordersの概念提起など臨床的分野で有名であった。私は臨床に大いに興味があったがECFMG資格がないので、早速research fellowを希望する旨を返事した。そして、当方には特別ファンダがないこと、給料はそちらで出してほしい旨をお願いした。その後いろいろな手続き書類などを送付し、正式にProf. Dameshekの教室に留学が決まったのは1962年の11月頃であった。身分はNew England Center HospitalのHematology Research Fellowで、給料は年間無税で3,600ドルということになった。この金額は当時1ドルが360円のレートでもかなり経済的には苦しい状態である。しかし、当時のNew England Center Hospitalのインターンは、衣食住は保証されるものの無給であった。また、日本からの海外に出るにあたって持参できるドルに制限があり、私のパスポートには大平正芳外務大臣の名前と200ドル持ち出し許可と記されていた。そこで、New England Center Hospitalの事務長さんにとりあえず病院の独身寮に入りたい旨と6月22日から入れるように連絡した。その結果、前述の部屋が電話代無料で月45ドルという条件で提供されたのであった。その後にUtah大学のProf. M. Wintrobeからも受け入れて下さるという手紙をいただいたが、ボストンに先に決まってしまった旨を書いて、丁重にお断りした。

1963年3月には米国で臨床もできるように、東京でECFMG試験を受験した。試験勉強をする時間がなかったので、誰にも知られず密かに受験するつもりであったが、当日試験場では他科の同級生1人と10人余りの顔見知りの後輩の医師や学生に出会ってしまい、もっと勉強してくるべきだったと後悔した。試験は1日で午前、午後に基礎を含む全科の筆記試験があり、中間に英語

力のテストがあった。筆記試験のほうは内科の問題が多く、私にとって有利に思えた。英語力のテストは患者の訴えが読み上げられ、それを病歴にまとめるものであった。とにかくあまりできただように思えなかつたが、医学知識、英語力の両方のテストに合格した。これで臨床医学知識に自信がつき、研究のみならず臨床に携わることができると喜んだ。さらに、万一契約が途中で中断した場合、どこかの病院で働いて帰国の旅費が稼げると安心した。

Prof. Dameshekの教室



6月28日午前、Dameshek先生と面会のappointmentにしたがって、Pratt Clinic New England Center Hospitalのビル(写真1)4階にあるDepartment of Hematologyの一角にある先生の部屋を訪れた。予想に反して部屋はさほど大きくなく、前室のドアが廊下に向かって開いており、隣の前室とつながっていた。その前室にDameshek先生の秘書さんと隣室のAssociate Prof. Mario Baldiniの秘書さんが忙しそうにタイプをたたいていた。秘書さんに案内されて入った部屋は先生が座しておられた机と、客用の腰掛けとがあるだけであった。先生はワイシャツにネクタイ、白衣姿でにこやかに迎えて下さった。話し始めたと



写真1. New England Center Hospital

き、「Your English is very good」とおっしゃって下さって、その後、私がやってきたことを尋ねられたので、研究はヘモグロビン代謝における鉄の再利用などを中心に行ってきたこと、教室は再生不良性貧血などを中心にしてきたことなどを話した。また、新しいこともやるつもりであることも伝えた。先生からは胸腺に興味があるかと聞かれたので、私見を披露し、最初の面談を終えた。その後、Tufts 大学の新人医師の規定にしたがって Educational Secretary という役目の女性のところに出頭して、身分証明書とネームプレートをもらい、リネンルームや、郵便物やカンファレンスを含む病院のスケジュール、そのほか給料の小切手などを受け取れる郵便室を教えられ、さらに、病院の一斉健診の日時を告げられた。このとき、病院の医師はすべて American Medical Association (AMA) に加盟することになっていると言われ、大変驚いた。日本でも全国の医師が一律の医師会に属していれば、医療に関する諸問題は現況と大部違っていたんだろうなと今でも思っている。

7月1日は新たに病院で働くことになった医師の健診日で、まず、看護婦から病歴を聞かれた後、医師の診察を受けたが、担当医と互いに自己紹介しあったところ、Hematology 所属とわかつて診察は簡単に終わった。後に他の人から聞いた、陰部検査なども行われることもなく、破格に簡単に済んだようだった。

ラボに勤務初日に、染色体と細胞化学、造血などを研究していた Assistant Prof. Jack Mitus から声をかけられ、その部屋にとりあえず出入りすることになった。この部屋では Dr. Kosmos Kiossoglou というギリシャ人 fellow が女性研究助手と染色体の仕事に従事していた（写真 2）。このほか Dameshek 先生の教室には Mario Baldini 先生の血小板グループ、さらに、ヘムを研究するグループがあり、別のビルには Assistant Prof. Robert



写真 2. Dr. Mitus のラボグループ：Dr. Kiossoglou と実験助手と共に

Schwartz の免疫のグループ、凝固のグループ、さらに、他のビルに胸腺などの研究グループがあった。したがって、Hematology の教室には教授と 3 名の幹部のほか clinical fellow を含む総勢約 20 名ほどの医師が所属していた。その国籍は米国のか英語、イタリア、オーストリア、ギリシャ、日本、インド、スリランカ、メキシコ、チリ、ブラジル、アルゼンチンなど多彩であった。その他 10 名くらいの臨床検査技師と実験助手が働いているという大所帯であった。

ここで初めて Baldini 先生の下で研究されている日本人の fellow にお会いした。お一人は関西医科大学内科助教授の守屋邦男先生で、ニューヨーク (NY) から移ってこられ、ほぼ 1 年血小板の仕事をされ、1 ヶ月以内に日本に帰国されることになっていた。守屋先生は私と同じ Posner Hall に単身で住んでおられたので、わずかな日々であるが、いろいろラボや病院、近隣の情報を教えていただいた。もうお一人は新潟大学第二内科学講師の寺田秀夫先生で、御家族と一緒に来られており、Baldini 先生の fellow として 1 年前から血小板の仕事をされていたが、さらに 1 年間滞在される予定であったが、6 ヶ月後に身内の御不幸で急きよ帰國された。

Hematology の公式スケジュールは今では詳細には覚えていないが、月曜日、水曜日、金曜日は Dameshek 先生の回診があり、それにはおおむね教室の全員が参加することになっていた。しかし、research fellow に関しては、仕事中の場合は自由に出没することができた。また、回診前に Dameshek 先生が教室の狭い臨床検査室で clinical fellow と一緒に患者さんの血液標本を見ることになっており、Hematology の幹部もしばしば参加した。特に Mitus 先生は臨床に熱心で morphology も得意なせいか必ず出席されたので、私もしばしば参加した。Mitus 先生は優れた教育者で、しばしば、clinical fellow が症例のことで相談に来ていた。また、教室には全米から診断の難しい症例の consultation があり、Mitus 先生はそれらの症例の血液標本を clinical fellow や私に見せて下さって、一緒に議論（試験？）をして下さった。このような機会にオレゴン州から送ってきた Chediak Higashi 症候群のスマアを初めて見ることができた。これらの経験は将来的に血液臨床に携わる上で非常に得るところが大きかった。Dameshek 先生の回診は、しばしば教室への訪問者も参加することがあったので常に人数が多くかった。患者さんの部屋を訪れた後、部屋の前の廊下でインター、レジデンントが症例を紹介し、さらに clinical fellow が補足説明やコメントを加えた後、参加者全員で Dameshek 先生を中心に discussion することになっていた。ときには先生のほうから、それぞれの専門のスタッフに意見を求めるものもあった。したがって、回診には時間がかかる。また、Dameshek 先生は私のような 1 年目の fellow

の意見もきちんと聞いて下さった。当時のことゆえ、先生は臨床現場の医師に診断のほとんどは病歴・現症と morphology を含む血液検査の結果で決まると言強調されていた。この時期に病棟で、SLE に 6MP を用いた免疫抑制療法が実際に行われていた。

木曜日はラボにある会議室兼図書室で journal club があった。日本と変わりなく論文の紹介であるが、会議室に多くの血液関係の雑誌が常備されていた。この室の片隅にコピー機が設置されており、自由に文献をコピーすることができて感激した。なぜなら当時、慶應大学医学部には図書館を含めて一般の医師が使用できるコピー機が 1 台もなかった時代であり大変重宝したが、複写された文字は次第に紫色に変色し、1 年以上たつと消褪して読めなくなる代物であった。

火曜日はラボの research conference であったが、Dameshek 先生のところには多くの訪問者があり、その人たちの lecture を聞く日にも当てられていた。

ラボでは Dameshek 先生から myeloproliferative disorders の概念を直接拝聴する機会に恵まれたが、この概念を発表された頃は造血幹細胞が証明されていない時代であり、あらためて先生の先見に感銘を受けた。当然ながらこの時代には動物の造血幹細胞の CFU-S の話も話題になった。また、CLL はリンパ球の増殖よりも accumulation が主体をなしているとか、DiGuglielmo disease と refractory anemia, sideroblastic anemia などは heme 代謝の異常や急性骨髄性白血病への移行など、いずれも同様なクローナルな病気であり、一括して DiGuglielmo syndrome と呼ぶのがふさわしいという話もされていた。また、smoldering leukemia という概念も聞いた。Baldini 先生からは ITP の病因、治療などの話を聞かされ、Mitus 先生からは細胞化学や染色体分析の血液疾患診断に関する意義などを聞いた。Schwartz 先生は、bursa of fabricius が鳥の B リンパ球産生部位であり、T リンパ球の産生に胸腺が重要であり、人でも同様に B, T リンパ球が液性免疫や遅延型免疫反応に関係するなどという免疫の基礎や自己免疫疾患の病態と治療、輸血に関する問題点などもよく聞かされた。また、当時、興味を覚えたのは GVH の長期生存マウスには Hodgkin 病などに似たリンパ性腫瘍が発生し、腫瘍の起源は宿主細胞であるという Schwartz 先生の仕事であった。また、fellow の Rodriguez-Eldman が動物実験における generalized Shwartzman reaction が DIC-consumption coagulopathy のモデルであると発表したのも耳新しく、印象深かった。

土曜日午前の前半は Prof. Weinstein の主催する Infectious Disease 部門のグランドラウンドで、ときには私も出席した。後半は、Hematology 部門のグランドラウンドが行われ、主催はもちろん Dameshek 先生であった。これには hematology のインターン、レジデント、clinical fellow、research fellow、と幹

部も出席することになっていた。したがって、Hematology 部門に関しては日本と同じく週休 1 日であった。

Dameshek 先生は常にこやかであるが、威厳がある、一般的に米国では親しい間柄では first name で呼び合うことが多いが、Dameshek 先生は特別で、教室の誰もが朝の挨拶でも first name を使うことなく、Good morning, Dr. Dameshek と挨拶をするようになっていた。

自分の研究



あるとき Mitus 先生から家兎を使用して実験的水腎症を作り、赤血球増加症ができる研究をしているが、何か新しいアイデアがあるかと聞かれたので、自分が動物実験でしばしば経験してきた ferrokinetics のテクニックを応用して造血亢進を証明できるのではないかということを進言した。それが縁で、一連の造血の仕事に従事することになった。

動物飼育室は研究室内にあり、日本では当時病棟でも十分でなかったのに、動物飼育室も冷暖房完備であったのには驚いた。さらに、飼育員が常駐しており、飼育室の傍らにある小実験室ではちょっとした手助けをしてくれることになっていた（写真 3）。この人はリトアニアからの亡命者で、祖国ではオペラ歌手をして現在でも夜間はやはりオペラ歌手をしていたということであった。普段は作業服で働いているが、帰宅時に背広姿に代わると確かに堂々たる体躯で歌手然とした風貌になった。しかも、ときに動物室の中でオペラのアリアの一節を素晴らしい声で歌ってくれた。最初は動物ケージの確保、動物の購入から始めなければならなかったが、研究室の競争も激しく、1 年目の Fellow にとっ



写真 3. 動物舎にて飼育員（左端）と

てはケージの確保もままならなかった。さらに、水腎症を作るにあたって動物手術室の予約などいろいろ自分で行う必要があった。初め Mitus 先生が手伝って下さったが、少したってからは自分一人で動物に手術も行うことになった。しかし、当時の慶應大学の血液研究室ではありえなかった専任の女性実験助手がついたのはありがたかった。その上、動物の採血をするとき disposable の注射器や注射針をそろえてくれたのには、またまたカルチャーショックを受けた。なぜなら日本では当時病院ですら注射器や注射針は煮沸消毒したものを使用していた。また、驚いたことに研究室の電灯、エアコン、実験器具の電源は切る必要がないことになっていた。さらに、ラボ内のどこででもアイソトープを使用できたり、アイソトープを使用した動物も廃棄してもらえた。また、病棟でも、ラボでも輸血にはプラスチックバッグが使用されていたのも初めての経験であった。このような調子で仕事をこなしながら時間はかかったが、1964年10月に実験的水腎症による多血症の最初の論文が Blood に掲載され、続いて第2報 (jacketglomerular apparatus に関する論文) が12月に Arch Pathol に載った。

その後はこの実験的水腎症の発生機序について仕事を進めるところになり、水腎内圧の推移が造血に関係すると考えて、長期に実験的水腎症発症過程で腎孟内圧の測定に試行錯誤しながら取りかかったが、意外に時間がかかって1年ほど費やすことになった。結局 1965 年の Federation of American Society for Experimental Biology で発表することができた。スライドは原図を描いて渡すと病院のフォトセンターのようなところで、きれいな図や表を作り、スライドに仕上げてくれた。当時はパソコンがなかったので、書き込みや訂正のたくさん入った原稿を、ラボの秘書さんに渡してお願いすると、きれいに仕上げてもらえ、発表の用意ができる。また、この仕事を Boston Blood Club の一環であろうか、ハーバードの Peter Bent Brigham Hospital で F. Gardner 先生や D. Nathan 先生らの前で発表させてもらうことができた。また、大学の新聞からも取材された (写真 4)。この仕事は私が筆頭者として論文にまとめ、Dameshek 先生の最終許可をいただき J Lab Clin Med に投稿できたのは大分後の 1965 年秋になってしまったが、後にこれらの仕事が Wintrobe や Williams の教科書などに引用されてうれしかった。

当時の米国の時代・世相

当時の米国は 1962 年 10 月にソ連のキューバへのミサイル基地設置を巡って起こったいわゆるキューバ危機において、ケネディ大統領の決断により米ソの核戦争が回避された冷戦時代の

tor from the kidney which stimulates and leads to erythrocytosis. This is an attempt to measure the degree of induced hydronephrosis and erythrocytosis. Moderate, high, and combined high and intermediate pressures were applied. Using white male mongrels ligated the ureter and one tube was inserted into the kidney secured with ligatures so that the tube was made to rest in the kidney. The tube was led out through the skin at the animal's back and connected to a manometer. Manometric measurements were made at regular intervals.

England Medical Center investigated these four major experimental

pressure of from 200 to 300 mm Hg. This stimulates erythropoiesis and leads to increased erythrocytosis. A pressure of 400 mm Hg, did not result in erythrocytosis because of a rapid onset of

The findings, he says, while by no means conclusive, lead to the tentative view that there is a possible biochemical basis for the transformation of mast granules into melanin granules.

Journal of Investigative Dermatology, May 1963.



KEISUKE TOYAMA, M.D. W. J. MITUS, M.D.

A Reminder
All faculty and staff of the units of the Medical Center

写真 4. Tufts-New England Medical Center News

真っただ中であった。当時、私は東京代々木にある米軍宿舎（現在の青少年センター）で英会話の個人授業を定期的に受けていたが、いつもは簡単にに入るゲートのところで、係員に止められ、「どの家に何時に、何の目的で行くか」と尋問され、しばらく留められたのち、会話の先生とのアポイントが確かめられて、やっと敷地内に入ることができたが、敷地内がいつもと全く違う緊張感に満ちていた。先生に聞いた話では宿舎全員に自宅待機が命ぜられているということのみ知ったが、このときがまさにキューバ危機であった。また、私が渡米した年の 6 月にはケネディ大統領が米国で人種差別が最後まで残っていたアラバマ大学に黒人学生を入学させ、公民権法案を議会に提案した。また、米国各地に公民権運動が盛り上がりを見せ、8 月には黒人運動指導者キング牧師がリンカーンの奴隸解放宣言 100 年を記念する大集会を企画し、ワシントン DC での大行進における同牧師の「I have a dream」という歴史的な名演説がなされた。

Fellow の一人のアフリカ系米国人女性医師がクラシック音楽好きで、私にレコードを聞かせてくれたことがあった。そこで私がそんなに音楽が好きなら当然ボストンシンホニーのシーズンチケットを持っているだろうと尋ねたとき、「我々にはそれは不可能だ」と返答されて、初めて米国北部でも差別が残っているのだということを実感した。

1963 年 11 月 22 日金曜日は私にとって忘れられない日になった。昼食のための外出から帰ったとき、教室全体がいつもと違う静寂で奇妙な雰囲気に包まれていた。通路には人影も見られず、ラボのいくつかの部屋や会議室では医師や女性の研究助手がラジオを囁んで耳をそばだてていた。どうしたのだと聞くと、一人から「大統領がテキサスで撃たれた」という返事が返ってきた。その後しばらくして「President Kennedy died at 2pm

「Eastern standard time」という声がラジオから流れるとき、あちらこちらの部屋からすり泣く声が聞こえ、「我々の大統領が殺された」と叫ぶ者もいた。このような大事件に遭遇するとは思ってもいなかつた。

翌土曜日の朝、この事件のことを知ろうと思って町に新聞を買おうと出かけたが、街路にはいつもの土曜日と違ってほとんど人影がなく、店の多くは閉じていて新聞も入手できなかった。中にはショーウィンドーにケネディ大統領の写真などが飾ってある店が幾つか見られた（写真5）。

日曜日のお昼頃、知り合いになった東京大学心臓外科から留学されていた三浦健先生のお宅を訪ね、居間でテレビと一緒に見ていると、丁度、大統領暗殺犯と目され逮捕されていたオズワルドが警察から移送されるため警官に囲まれて、警察署の廊下を護送されてくるのがテレビに映し出されていたが、突然画面に一人の人物が飛び出てきたと思った途端、銃声がして人々がオズワルドの周辺に折り重なるように集まって、彼の姿が画面から見えなくなった。法治国家において重大犯罪の容疑者が警察内で殺されるのを、実際にテレビで目の当たりにしたときは本当に驚愕した。そして何か大きな陰謀でもあるのかと感じた。現在でも大統領暗殺の真相が判明しないという大事件の一部をテレビで目撃してしまった歴史的な日だった。

11月25日月曜日、例によってDameshek先生の回診があつたが、いつもより少し早く終了して、当時は教室にはテレビが存在しなかったので、病棟の片隅にあるテレビで、ケネディ大統領の棺が議事堂から墓地へと運ばれる葬儀の列が映し出されている光景を教室の人たちと一緒に見た。このとき幼かった故大統領の長女カロラインさんが、50年後に駐日米国大使に就任されることは、当然のことながら全く想像もできなかつた。

1964年頃から米国はベトナムに本格的に介入し始め、いつの間にか25セントや10セント硬貨が純銀ではなく、表面のみが銀でメッキされた状態になった。莫大な戦費が使用されたせいかと肌に感じた。

Prof. Dameshek の教室と日本人医師



私より前にDameshek先生の教室で研究または長期に滞在された方々は、熊本大学内科河北靖夫先生、東京医大臨床病理の福武勝弘先生、藤巻道男先生、岡山大学内科大藤真先生、京都大学内科深瀬正市先生らがいらっしゃった。私が働き始めて間もない9月にDameshek先生に呼ばれ、「Dr. Fukutakeが教授になって教室を尋ねてくるから迎えに行ってほしい」と言われ、福武先生をホテルに迎えに行き、病院の近くのギリシャレストランでの会食に同席したことがあった。また、東京医大内科の長村重之先生がDameshek先生の回診に参加されたこともあったが、この先生方に私が後に東京医科大学でお世話にならうとは夢にも思わなかつた。名古屋赤十字芳賀圭五院長にも例によって回診のときにお会いした。大阪大学病理の岡野教授が来られたときは、回診の後Freedom trailにお連れした。

名古屋大学内科の日比野進先生、木村禧代治先生、山田一正先生が御一緒にDameshek先生を尋ねてこられたが、その日私は感冒でラボを休んでいたのでお会いできなかつた。

教室では感冒にかかると、当時の日本と異なって「人に病気をうつすと困るから早く帰って休養しろ」と皆から言われるのが習慣であった。しかし、コンビニもない時代に病気になって寄宿の部屋に寝ていると、冷蔵庫もなく食料の蓄えもないので、発熱のあるときに食べ物を買いに行くこともできないという悩みがあつたが、教室のfellowが「食事は大丈夫か、何か食べ物を届けようか」と電話をくれたり、寺田先生が食事を差し入れて下さったのには、今でも感謝している。関西医大内科の大久保滉先生が訪問されたときは、Baldini先生がfellowたちを自宅のパーティへ招待された日であったので、大久保先生を私の車に乗せてお連れ

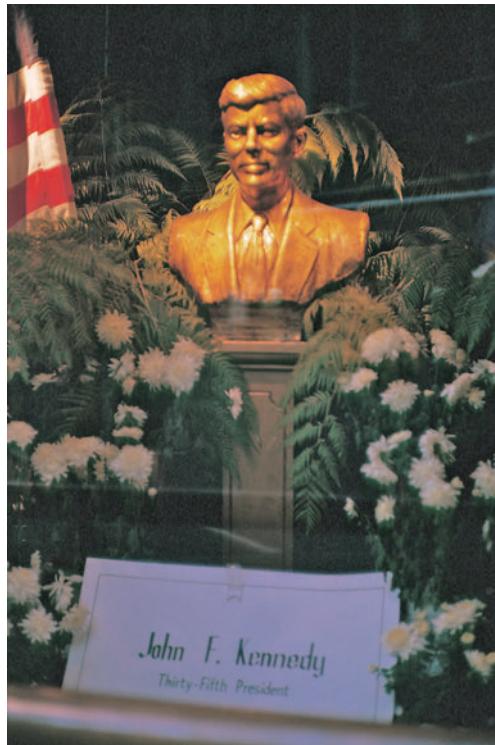


写真5. 百貨店ショーウィンドーに飾られたケネディ大統領の追悼像

した。Baldini 先生のお宅は前庭に招待者の車がほとんどパークできるくらい広く、邸宅の部屋に大きな木やローマ時代の貴族の屋敷のように大理石の像が置かれているという豪邸であった。

病院生活



Hematology fellow としての勤務が始まった頃、病院の新メンバーがそろったためか、S. Proger 病院長を中心に、Department head の教授たちをはじめとする病院の医師全員で記念写真を撮った。

私は寄宿に住んでいた関係から、病院までは Harrison Avenue を渡るだけだったので、部屋から白衣を着たままでラボに通った。食事は寄宿舎に食堂がないので朝食は取らず、昼食は病院の医師、看護師、検査員、学生などが入れるカフェテリア（自分で食事をトレイに取ってレジで現金を払うという普通のスタイル）ですませたり、Mitus 先生や Kosmos や他の fellow たちと病院のそばの小さなカフェで食べた。また、病院には医師のみが昼食をとることができる staff dining room という特別食堂があった。ここではウェイトレスが注文を取りに来て食事をテーブルに運んでくれる。お金は伝票にサインをすると給料から差し引かれることになっていた。その上ここでは有名な教授たちと同席になり話すこともできたので、病院で医師が大切にされているように感じ気分が良かった。しかしながら、味気ないのは夕食で、ほとんどの人が家庭に帰るので、一人で病院のカフェテリアで食べるか、病院の近くのカフェや中華料理店で食事をとる他はなかった。しかし、ときを経るにしたがって友達ができて、次第に夕食を誰かとレストランでしたり、どこかの御家庭に呼ばれたりするようになり、味気なさは解消した。

給料は毎月末の昼前に病院のメールルームの私書箱のような棚にチェックが入れられる。この時間には医師たちが続々とやってきて、このチェックを取り出し、近くの銀行に持参して、現金化したり、自身のパーソナルチェックにするのが習慣になっていた。慶應大学では大学院課程修了後は無給助手という身分だったので、これが生涯最初の給料ということになり感慨無量であった。

9月に入ると街路樹が紅葉し始め、学生たちが戻ってきて授業が始まるので本格的に仕事が始まった感じがするようになった。私はこの頃には Dameshek 先生との契約が翌年も確実に延長されると伝えられて安心した。

9月末にマサチューセッツ免許をお持ちの寺田先生に私の車に同乗していただいて役所へ行き、口頭試験と実地試験を受けて運転免許を取ることができた。口頭試験のために勉強する教本は

Q&A 形式の 100 間位の薄いパンフレットであったが、内容は「スクールバスから子供が乗降しているときは、反対車線の車も停止する」「水たまりに飛び込んでブレーキが利かなくなったときは、走りながらブレーキを何回か踏んで乾かすべき」「凍った道路では強くブレーキをかけない」などと実用的な項目ばかりで、現実にこのおかげで助かったこと也有った。その合理的なことにも感心することになった。

車の運転が可能になることはいろいろな意味で世界が広がることになる。ボストンでは、他の病院を訪れる場合、少し大きなものを買うため、どこかのお宅に招待されたときも車が必要であることが多い。後にニューヨーク (NY) や Atlantic City, NJ の学会に出席するにも必要になったし、また、レクリエーションとして夏の海水浴や秋の紅葉見物、近郊のプリムス、コンコード・レキシントンなど歴史的な場所の訪問などには必須である。あるとき、同僚の fellow が「主助は馬鹿だ。寄宿舎に住んでいるのに何故、車を持つのか」と言ったので、私は「君こそ馬鹿だ。自分は車を持っているから寄宿舎に住んでいるのだ」と言い返し、周りの人が笑ったことがあった。

通りを隔てた Tufts 大学医学部の教室では、Dameshek 先生の授業も見学することができた。先生は授業の前半は日本と同じように系統的な血液学の話をされたが、後半には必ず非常に先進的な話をされ、なるほどと感心させられた。また、スライドをたくさん使用しないで学生が講義を聞きながら考えられるようにすべきとも言っていた。このことは後に自分が日本で講義を担当するようになった折に教訓になった。また、血液学の学生実習を手伝ったこともあるが、学生たちが使用している顕微鏡がそれぞれ異なっており、当時としては極めて高価な双眼のニコン顕微鏡あり、ライツの古い一眼の顕微鏡ありの千差万別であった。不思議に思って尋ねてみると、それぞれ私物だという。当時貧しいとはいえ慶應大学では全員の顕微鏡は学校でそろえて用意されたものだったので、つくづく日米の考え方の相違というものを感じた。

当時の Tufts 大学関係の教職は、Boston City Hospital の Prof. W. C. Molony, J. F. DesForges, St Elizabeth Hospital の F. Stohlman Jr. などがおられ、学生の講義や若手の研究を指導をされていたので、ときにはその講義を拝聴することができた。

10月最後の日曜日には夏時間が終わって秋が深まってきた。11月に入ると小雨がちな天候が続くようになった。また、感謝祭の日には家庭を持つ医師たちが、独身の医師を家庭に招待して七面鳥の料理を御馳走するのがしきたりであることを知った。12月の初めになると初雪があり、雪をかぶった街の景色は非常にきれいになるが、交通には極めて困難な季節になった。当然タイヤをスノータイヤに変え、oil を冬用に交換し、窓ガラス、ワ

イバー、鍵穴などの凍結に対して融解剤を用意するなど準備が必要になる。さらに、当時の車は少し放置するとバッテリーが上がりてしまうので、休日には充電のためにいたずらに高速道路を走らせねばならなかった。また、道路には融雪のため塩化カリがまかれるので車の底面が傷みやすいという悩みがあった。しかし、この頃になると病院の近くの Boston Common にはクリスマスのデコレーションとして、キリスト生誕の小屋や博士や羊などの人形が飾られ、それらが豆電球で飾られ、さらにそれらが雪をかぶって美しい幻想的な風景を醸し出すようになった。

初めての ASH と クリスマスシーズン



12月の初めには American Society of Hematology の学会に出席することが許された。Boston Logan Airport から Air Shuttle という便でワシントンへ飛んだ。これは今では考えられない簡単なもので、予約も必要なく、出発時間の少し前に飛行場のゲートを通り、旅行鞄は飛行機に乗る寸前にタラップのそばにいる乗務員に手渡し、飛行機に乗って適当なところに席を取る。時刻になると飛行機が飛び立ち、水平飛行になると乗務員が回ってくるので支払をする。Washington National Airport に到着すると、タラップの下に置かれた荷台から自分の荷物を取って空港ゲートの外に出るという、非常に便利な乗り物で、まさに空の乗合バスというべきものであった。ワシントンの地理がよくわからないので、White House に近い Hay Adams Hotel を空港の電話で予約して宿泊した。華やかではないが重厚な作りのホテルであった。後年になってこのホテルがワシントンの名門ホテルであったことを知ったが、2度とこのようなホテルに泊まるることはなかった。ホテルから会場は徒歩で行けた。会場で当時珍しかった日本人らしき医師に日本人かと尋ねられ、お互いに自己紹介し合ったのが、京大第一内科から NY 州の Cooperstown に留学され、さらにカナダモントリオールの McGill 大学に移っていた笠倉新平先生であった。これが縁で在米中には先生からときには電話をいただいたり、学会でお会いしたりした。学会期間中にアーリントン墓地を訪れ、暗い冬の空の下ケネディ大統領の真新しい墓に永遠の炎が燃えているのを見て感慨を新たにした。

12月半ばのある夜に Hematology のクリスマスパーティが病院で行われた。教室の幹部、医師、実験助手、検査員、秘書など全員が病院の広間に集まった。今ではどんなパーティだったか思い出せないが、今でも鮮明に覚えているのは Dameshek 先生の前に一人ずつ進み出て各々ねぎらいの言葉をかけていただき、医師は封筒をいただいた。中には Blood 誌の 1 年間の予約購読の

カードが入っており、例年の恒例のようだった。医師以外の女性たちは何か別の包をいただいているようだったが、何だったか不明である。

その数日後、病院全体のクリスマスパーティが、S. Proger 院長と事務長の Mr. Vigers の主催で病院内で行われた。普通に挨拶、乾杯から始まり音楽も入った。宴がたけなわになり、ユダヤの音楽が奏でられると、Jewish の若い医師たちが集まり輪になつて、自分の胸の前に腕組みをして、膝を折った姿勢でコザックダンスのような踊りを踊り、大変盛り上がったが、これは印象的だった。最後には司会者が出席者全員に、女性は内側、男性は外側に輪になって手をつないで立つように指示し、音楽が始まると男女それぞれが反対に向るように指示した。そして、音楽が止まると男女が向かい合いになり、その相手とダンスすることを命じた。私のお相手は生憎私より大分背の高い女性になってしまったが、逃げ出すわけにもいかず冷や汗をかいたが、全員が紳士淑女だったので助かった。このときの経験から、ノーベル賞の授賞式では背の低い受賞者には何か配慮があるのかなと時々思った。

また、この数日後の日曜日夕刻に Dameshek 先生から教室の全員が Cleveland Circle 近くの先生の自宅に招待された。立食ではあるが、とにかく教室の全員が御自宅に入れるほどの邸宅であった。御自宅のあらゆる部屋や廊下に日本人形や書画など骨董品が飾ってあるのには驚いた。

私のいた寄宿舎の自分の部屋の電話は直接外線を呼び出すことはできず、すべて交換台を通ることになっていた。クリスマスの日に電話を取って交換台を呼び出したところ、交換手が「Merry Christmas, Dr. Toyama」と、少しセクシーな美しい声で答えてくれたので、どんな人なのかと好奇心を抱いた。後になって病院の交換台の見えるところを通ったことがあったが、3人ほどの交換手が見えたが、どの人もお年を召している方のようだった。クリスマス翌日には Mitus 先生が自宅でパーティをして下さった。とにかく米国の医師たちのパーティにおけるオペラ、音楽、絵画などの美術、スポーツなどに関する話題の豊富さと、ユーモアあふれる話術には圧倒される思いがした。私も、食前にたまたま米国で人気の大学アメリカンフットボールの試合をテレビで見ているときに、「あ！ Fair catch だ」と思わず口に出してしまったところ、一緒に見ていた Baldini 先生の fellow の Dr. F. Morrison (後にミシシッピ大学教授) が「Football がわかるのか、好きか」と尋ねてくれて、それが縁で友達になった。

年末は日本と違って、大晦日の夕方まで普通に働いた後、Mitus 先生の部屋で数人の医師たちと、簡単に乾杯をしてお別れとなった。その夜は渡辺先生の紹介で知り合った New England Center Hospital のカナダ人の Dr. MacPherson が御家庭パー

ティに招待して下さったので、1964年の午前0時に「Happy New Year」とクラッカーを鳴らして、一家と一緒に大騒ぎして祝うことができた。病院がいわゆる Jewish 系のせいかクリスマス休暇はなく、元日1日休日で2日から普通に働き始めたが、日本の年末年始と大いに違ってさびしい感じがした。

Boston Blood Club と 欧米のゲスト



当時のボストンには、Boston City Hospital の Harvard 部門に胃内因子発見者の Prof. W. Castle が現役でおられ、Peter Bent Brigham Hospital に有名な Sydney Farber 先生や D. Nathan 先生、マサチューセッツ工科大学には鎌状赤血球症の Hb 解析で有名な V. Ingram 先生などがおられ Tufts 大学一門と Boston Blood Club を組織されていた。Dameshek 先生の教室には欧米からのゲストも多く、1964 年に入って最初に来られたのはフランスの Georges Mathé 先生である。先生は世界で初めてヒトに骨髄移植を試みられ、事故にあった原子力科学者に移植を行って命を救った方で、がん治療において移植細胞ががん細胞と戦うことを発見し、免疫ががん治療に重要であるという観点から白血病治療に BCG を導入した人であった。同じ頃に英国から、後に Aplastic anemia-PNH syndrome を提唱された J. V. Dacie 先生が病院を訪れられて、Boston Blood Club の一環として lecture をされた。また、いつだったかはっきり思い出せないが、William B. Castle 先生が病院の講堂で悪性貧血や内因子発見についてお話をされたことがある。悪性貧血患者治療に肝臓を “never on Sunday” で食させたと、当時有名であった映画のタイトルを入れられ聴衆の気をひかれたのが記憶に残っている。

1964 年の 5 月に、免疫寛容の獲得の研究でノーベル賞を受賞された Sir F. Macfarlane Burnet 先生が Dameshek 先生を訪問されたことがあった。Lecture の後、Dameshek 先生がラボを案内されて回られた。私が働いていた部屋では私のことを日本から来ている医師と紹介して下さって、さらに、「Burnet 先生に自分の仕事を御説明しなさい」と言って下さった。日本ではこのようなことは一度もなかったので、大変光栄なことと感激して、一生懸命説明した。この経験でモチベーションが上がったことは事実であった。

1964 年の春から夏



4 月頃になるとボストンではまだ木々の芽生えには早いが、氣

候が春めいてきたので、weekend を利用して三浦健先生御夫妻とワシントンの桜見物に車でかけた。当日は快晴に恵まれ桜は満開となった。日本ほどではないが、やはり米国でも珍しいような人出で、騎馬警官が交通整理を行って、ポトマック河畔では駐停車は禁止され、低速で車を走らせながらの観桜となった。日本と異なって音楽、宴会は禁止されているのか、静かで清潔な感じがし、川面に映えて桜は誠に見事であった。しかし、交通整理をしている警官が、少しでも停車したりした車を見ると、ののしりながら車を足蹴にしたのを見たときはやはり日本と違っているなと感じた。

5 月初めには Atlantic City, NJ で催された Federation of American Society for Experimental Biology に教室からは Dameshek 先生をはじめ大勢の医師が出席した。教室では学会に出席するときに前もって旅費を小切手で手渡されたが、記憶では 50~70 ドルくらいで、旅費にはとうてい足りないので、一般的には車をシェアしていくことになっていた。前もってモントリオールから電話下さった笠倉先生と学会で会うことを約束していたので、学会前日に笠倉先生と Captain Stern's という有名な sea food のレストランでおいしいロブスター料理を食べて大いに楽しんだ。学会では Mitus 先生が私たちの仕事を発表された。学会中 Atlantic City で有名なボードウォークを歩いているときに、東大第三内科の服部理男先生と八幡義人先生にお会いしてお話をしたが、このときが八幡先生とは初対面であった。また、その夜 Dameshek 先生御夫妻が会期中に学会に出席していた全員を Captain Stern's の dinner に招待して下さった。感心したのは Dameshek 先生が皆に食前に one drink を注文してよいとはっきり言われたことである。学会から帰ってきて最初に Dameshek 先生と顔をあわせるときは、先生は医師の一人一人とにこやかに welcome back と言って握手をされ、どういう話題が最も興味深かったかと尋ねられた。このことは学会中もぼんやりしていてはいけないという無言の教育のように感じた。この手を後になって日本でも使ってみようかと思ったが、ついぞ実現し得なかった。

学会に出かける頃は、ボストンはあまり木々が緑縁していないが、帰ってくると、天気は快晴になることが多い、エルムの木々が新緑となり、いたるところで花が咲いて、ボストンの最も美しい季節になっていた。

5 月 22 日は Dameshek 先生の誕生日で、回診の後で教室の会議室で全員が集まってお祝いをした。ケーキとコーヒーだけのささやかな会ではあったが非常に和やかな雰囲気であった。私はこのときまでラボに写真機を持ち込んだことはなかった。なぜなら、私は見学者ではなく、給料をもらって働いている身であるという自負があった。また、携帯電話やスマホのような手軽で高性



写真 6. Prof. Dameshek と Dr. Shwartz (教室の Dameshek 教授誕生日会)

能なカメラがない時代であり、当時のカメラは常時携帯するには大きすぎた。私のカメラは当時世界的に最新のキヤノンカメラではあったが、普通サイズのもので、ストロボや露出計も内蔵していない。したがって、簡単に室内で撮影できるものではなかった。さらに、シャッターはフォーカルプレーンで、その上当時の普通のカラーフィルムは ASA23 のコダックフィルムだったので、撮影時のカメラの静止が難しく、写真は手振れで不鮮明になってしまった（写真 6）。

6月末で年度が切り替わり、少なくとも clinical fellow は全員入れ替わる。したがって、記念に Hematology 全員で New England Center Hospital の Bennet St. に面した入り口で記念撮影をした（写真 7）。残念ながら Baldini 先生とそのグループの医師と実験助手が不在で、この写真に写っていない。

ある土曜日に慣例の clambake party が、病院主催でボストンの北西 Ipswich に近い海岸の Castle Hill というところで催された。ここは屋敷の前に緑の芝生の庭が海岸まで広がっている。しかも、この海岸は非常に美しい private beach になっているという素晴らしいところである。このパーティには病院の全員が招待されることになっていて、前以て、当日ロブスター 1 匹を食べることができる券が男性 1 人に 2 枚ずつ配られる。したがって家族持ちの人は、欠席する人あるいは 1 枚不用の人から余分の券を入手しなければならない。独り身の男性にはこの券が配られた途端に、女性から自分を連れていってほしいと申し出が殺到することになっていた。私にも申し込みがあって、当日は女性実



写真 7. Hematology 全員写真



写真 8. 病院の clambake party

験助手を車に乗せて行ったと記憶している。現地では庭の真ん中には大きな釜が据えられ料理人がロブスター や、ハマグリを料理していた。その周りには顔見知りの医師たちや家族たちが散らばっており、砂浜で遊ぶ人々や子供たちもいた。Dameshek 先生は欠席だったが Mitus 先生の家族や Hematology の人たちと合流し、大きいロブスターとハマグリの食事を堪能した（写真 8）。ビーチの海水は非常に冷たくて多くの人は甲羅干しやビールを飲んで日向ぼっことおしゃべりに興じていたが、Mitus 先生は元気よく泳いでいた。

(次号へつづく)